

抗核抗体・自己抗体

抗体とは免疫グロブリンとも呼ばれ、リンパ球のうち B 細胞（形質細胞）が産生する蛋白分子で、特定の物質を認識して結合する働きを持ちます。体内に侵入した細菌やウイルスと結合して、それを好中球やマクロファージが認識、貪食して体内から除去します。本来この抗体は自己と非自己を認識し、非自己を除去するように働きます。しかし、何らかの原因で自己に対して反応するようになってしまったものを「自己抗体」と呼び、多くの場合、細胞の核成分蛋白と反応するために「抗核抗体」と呼ばれています。抗核抗体の他にも抗リン脂質抗体や抗好中球細胞質抗体、抗基底膜抗体、補体系を障害する自己抗体などがあります。

全身性エリテマトーデス（SLE）や混合性結合組織病など、膠原病の患者さんの多くは血液検査で抗核抗体が陽性となります。しかし病気のない人でも約 20%の人が陽性となりますので、抗核抗体が陽性だけでは膠原病とは診断できません。

有名なものとしては、SLE では抗 ds-DNA 抗体や抗 Sm 抗体、全身性強皮症では抗 Scl-70 抗体、皮膚筋炎では抗 Jo-1 抗体、混合性結合組織病では U1-RNP 抗体、シェーグレン症候群では抗 SS-B 抗体などがあります。